

商店街オープン in ナゴヤの取り組み

日高 史帆

新しい商店街の形

商店街がシャッター街と呼ばれるようになって久しい。全国どこへ行っても二十四時間営業のコンビニがあり、身近で手に入らないものもインターネットで簡単に入手できる。そうした購買機会の多様化により、商店街を取り巻く環境は厳しい状況が続く。

一方で、老朽化した建物をリノベーションして新しい種類の店舗を誘致することにより、新しい形の商店街として再生させる動きが注目されている。二〇一一年に福岡県北九州市で始まった「リノベーションスクール」の活動は全国に広まっている。宮崎県油津商店街では四年で二十五を超える店舗が新規に誘致されたことで話題を呼んだ。名古屋市内では特に円頓寺商店街でめざましく、空き家対策プロジェクト「ナゴノダナバンク」が店舗誘致に取り組んでいる。

商店街オープン事業

空き店舗対策においては、商店街が自ら取り組むことが前提であり、行政はそれに対し資金面で支援することが多い。本年度、名古屋市は新たな支

援策として「商店街オープン事業」(正式名称:商店街商業機能再生モデル事業)を立ち上げた。この事業は、単なる空き店舗対策ではなく、リノベーションを通じた新店舗の来店と商店街の応援団作りを目指すものであり、本事業をきっかけに、商店街全体が再建に向けて動き出すことが期待される。

商店街OPEN2018

商店街関係者に建築士や地域住民、まちづくりに関心のある人などさまざまな立場の人を加え、ワークショップを行った。ワークショップといっても単なるアイデア出しや意見集約を目的とするのではなく、実際の空き店舗を対象とした事業計画と、商店街を応援するチーム作りを目的とするものである。今年度開催した三つの商店街(公募により選定)について、ワークショップを通して立案された計画をここに紹介する。見事実現した際にはぜひお立ち寄りいただきたい。

①名古屋をウラまで味わえる店

(名古屋駅西銀座通商店街)

高層ビルが次々に新設される名古屋

駅東に対し、駅西は中低層の建物が建ち並ぶ。外国フードやサブカルチャーの店が点在し、どこかアングラな雰囲気漂う。「暗い」「治安が悪そう」といったマイナスイメージを地域の特長として活かすべく、「エキウラ」を一つのキーワードとして空き店舗の役割を検討したところ、名古屋をウラまで深く味わえる場所として、朝から夕方まではモーニング専門店、夜間は大ナゴヤ大学の活動拠点として活用する方針が決まった。

②シェアキッチン(笠寺観音商店街)

名鉄本笠寺駅と笠寺観音の間にある。四本の東西通りからなる商店街である。駅と日本ガイシホールが近いという立地から、外からの来訪が期待できる。駅前の複合ビル一棟を丸ごとリノベーションする計画を立案中であり、その第一手として半地下部分にシェアキッチンを作るべく、運営の担い手となるシエフを公募と声掛けにより集めている。

この地域は、笠寺まちづくりの会「かんではmonzen亭」によりまちづくりの下地ができており、その強みを活かして地元へ愛される店舗が完成することを期待している。

③専門店が集う商店街(西山商店街)

地下鉄星ヶ丘駅からバスで六分の場所にある小さな商店街である。近隣には全国トップクラスの生徒数を誇る西山小学校があり、人口減少や少子化とは縁遠い地域である。しかし一方で商店街では高齢化が進むほか、若い近隣住民のニーズに対応しきれず、商店街で足を止める人は少ないという。対象とした二階建ての空き店舗では、面積が広いことを活かし、アクセスしやすい一階に複数のテナントのショップを設け、気軽に立ち寄ってもらえるような工夫を設計に込めている。今年度はテナント出店者によるチームの結成を目標とし、来年秋ごろの開店を目指す。



対象物件を見学



模型で物件の活用イメージを共有



各参加者の商店街に対する応援方法